令和8年（2026年）
8
No.838

The Religion News
宗教新聞
https://www.religion-news.net

発行所 宗教新聞社
〒160-0022 東京都新宿区新宿5-13-2
電話 03-3353-2940(代)
FAX 03-5363-5182
religion@sage.ocn.ne.jp
郵便振替口座 00130-9-22704
ⓒ宗教新聞社 2026
購読料（税込）　1部 500円　半年 3,000円（〒共）　年間 6,000円（〒共）

霊峰剣山本宮の山頂大祭

クマザサの斜面を神輿渡御

徳島県

西日本第二の高さを誇る徳島県の霊峰・剣山（標高1955メートル）の山頂で7月17日、剣山本宮宝蔵石神社の例祭「御神輿渡御祭」が執り行われた。主催は一般社団法人忌部（いんべ）文化研究所で、氏子らでつくる先達会や一日修行体験に応募した一般の人たち100人が古式にのっとり、かつ楽しく祭りを斎行した。（多田則明）

クマザサの斜面を山頂に向かう大神輿と小神輿（手前）

大祭は16日の宵宮祭に続き、17日午前11時から神輿渡御。巨大な磐座（いわくら）「宝蔵石」を背にした剣山本宮での神事に始まる。宝蔵石には、源平の屋島合戦に敗れた平家の一行が安徳天皇と共に剣山に逃れてきた際、安徳天皇の宝剣を納めたという伝説がある。

神事を終えた一行は神輿を担いで山頂近くの西テラスへ。木製の天空テラスで、笛や太鼓に合わせ、神道芸能や阿波踊りが披露され、参列者を喜ばせていた。

テラスからクマザサの斜面に下りた一行は神職からお祓いを受け、神輿渡御が始まった。四国山脈を見渡しながら、須佐之男命と安徳天皇をお祀りしたご神体（御幣）が乗せられた大神輿とそれに続く小神輿が、白装束の担ぎ手たちに導かれ、「六根清浄」の掛け声とともに、普段は立ち入りが禁止されているクマザサの中を進む様子はまさに圧巻だ。山頂の三角点を中心に設置された複数の木道には、平家を思わせる赤い旗を手にした法被姿の参加者が、先払い役を務めていた。

山頂での神事

神輿が御旅所に模せられた頂上に着くと、二本の御幣が三角点に祀られ、参列者と登山客が見守る中、神事が行われた。剣山は観光リフトで9合目まで登ることができ、山頂まで徒歩50分なので一般の登山客も多い。外国人の姿もあり、日本研究のため1年留学して今回初めて参加したというドイツ人の女子大生は、「伝統的な祭りに、とても興奮した」と語っていた。

社殿裏の宝蔵石と祠

剣山山頂の宝蔵石神社の例大祭が現在の形で行われるようになったのは昭和52年（1977）からで、前年9月の風水害による崖崩れで、登山口にあった両剣山神之・両剣前神社・福生権現の3社殿が全壊したため。同所には剣山本宮劍神社のみが再建されている。

冒頭の「忌部」は大和王権の宮廷祭祀を司った氏族で、『延喜式』では阿波忌部が天皇即位の大嘗祭に際して、神服（かむみそ）として麻で織った麁服（あらたえ）を調進することと定められており、現在では忌部の末裔である三木家が剣山麓で栽培された麻から糸を紡ぎ、徳島市の忌部神社で伝統の機織りを復活して布を織り、奉納している。

剣山の西にある三好市東祖谷には、平国盛ら平家の落人が隠れ住んだとされる。平家の末裔の一つ阿佐家には「八幡大菩薩」と書かれた赤旗が伝わり、東祖谷歴史民俗資料館に展示されている。急峻な山に囲まれた隠れ里で生き延び、末裔が暮らしのために作ったとされる「かずら橋」は観光の目玉だ。

剣山は、古代イスラエルの失われた「契約の箱」が眠っているという「失われたアーク伝説」でも知られる。山頂の地形が古代エルサレムの神殿配置と似ており、神輿の構造がアークに酷似していることなどから、明治以降の「日ユ同祖論」と結びついたのであろう。ちなみに7月17日はアークが剣山にたどり着いたとされる日である。他にも、邪馬台国は徳島の神山町にあり、卑弥呼の墓があるとの話や、漢字以前の神代文字の一種「阿波文字」が伝わるなど、四国には古代ロマンをかき立てる物語が多い。

天地

先月13日に開かれた「生命尊重の日の集い」に参加した。5人の講師のお話は、いずれも実践を踏まえた説得力のあるものだった（詳細は今号8面）。その中で、倫理研究所の松本亜紀専門研究員が「子安講」（こやすこう）について触れられていて、考えさせられた▼子安講は、安産や子供の健やかな成長を願って地域の女性たちが集まり子安神に祈る信仰の場であり、出産や産後の過ごし方の知恵を教え合う場だった。子安講や帯祝いの風習などに、お産を神に見守られる、命も授かりものだという習俗を見ることができるという▼近年、子育て支援や母子支援は政策面での大きなテーマだ。地域では「ネウボラ」の仕組みを展開する所もある。また、こども家庭庁では『はじめの100か月育ちのビジョン』として、妊娠期から小学1年生頃までの時期を支えるとしている▼日本人が伝統として受け継いできた、神仏に祈り、地域で支え合う仕組みは薄れてきた。ここに現代の諸課題解決の一つの鍵があるように思われる。